

山本和儀 編著

『統合教育の実践』 心と身体のリハビリテーション社会を目指して

尾崎和洋

(社会福祉法人聖風会

千種川リハビリテーションセンター)

本書を読んで、そのとおりだ、これだと感じたことは「子供は子供の中で育つ」「人は人の中で育つ」という言葉を見つけたときであった。筆者も行政と協力し、療育相談事業を立ち上げ現在も取り組んでいる。その目的は「母親を支え安心できる場作り、子供を地域の保育所へ学校へ」である。本書は、当事者、家族の会、施設長、教師、理学療法士、行政それぞれの担当者、責任者が執筆し、山本和儀氏が実践してきた大東市のノーマライゼーションの足跡と今後の課題について述べている。

本書は、教育とは誰のために何のためにあるべきなのか、教育のあるべき姿を基軸とし、読み進むうちに筆者らリハビリテーションにかかわる者のあるべき姿や考え方、人としての生き方のヒントになる箇所にも何度も出会う。本書の一部を紹介しよう。

「当時の私は『この世に神も仏もあるものか』と周囲の目を気にしながら悶々としていた。本来のう天気な私の性格も、『辛い、苦しい』の毎日に、自ずと暗い性格へ、『死』をみつめ、涙する日々を重ね、公園

デビューも果たせぬまま親子で家に閉じこもる毎日が続いた。(中略)障害を持つ仲間との出会い、応援して下さる教師、地域の人々との出会いが待ち受けていた。その反面、公園へ行くと立ち去る親子、心ない光景も嫌というほど体験してきた。『この子は人間よ、あなたたちと同じ人間なのよ』と叫びたかった。人との出会いは、人生を大きく変える。大東市では、この頃親たちは障害児も保育所へ、幼稚園への運動を高めつつあった。なぜ幼稚園への入園にこだわったのか、それは、公園デビューを果たしてから息子の様子が一変したことからである。三輪車をこいで遊んでいる友達を見ると、自分も乗ろうとして必死でチャレンジをする。何事も見よう見真似でやろうとする姿勢、とにかく諦めない。友達の影響の素晴らしさそのものである。幼稚園では5名を受け入れた。園外に飛び出すT君、教室に入らないKさん。ウロウロするわが息子。(中略)集団ルールも泳ぐことも喧嘩することも、ずるさも数え上げれば切りがないほど一杯の体験を積んだ。」

統合教育を推進することは、教育のみならず中途障害を持ちながら、住み慣れた地域で安心して生きることへの取り組みや、今日の青少年問題を解決する、一つの糸口になりはしないだろうか。そして、エンパワメントの大切なことに気付かせてくれる。21世紀の教育のあるべき姿、人としてあるべき姿を導いてくれる一冊のように思う。

●四六判 236頁 2002

定価(本体 1,600円+税)

朱鷺書房・刊